

大**中**PRIDE



大津町立大津中学校
生徒指導通信 11号

令和5年9月8日(金)
文責：岡村 康平

奇跡は努力の結晶

今月はバスケットボールのW杯が沖縄で開催されていました。日本は予選リーグ(1次ラウンド)で格上フィンランドに逆転勝利。順位決定ラウンドではベネズエラ、カーボ・ベルデに勝利し、48年ぶりに自力でパリオリンピックへの出場権を手に入れました。東京オリンピックでは全敗に終わった日本。そこから、ここまで這い上がってきました。この快進撃の裏には、想像もつかないような努力があったと私は思います。



今回はとあるバスケットボール選手について紹介したいと思います。

名前は「田中正幸(たなかまさゆき)さん」。小学校からバスケットを始め、中学では県の選抜チームに選ばれるほどの実力者でした。1試合50点中33点を決めたことのあるチームの要でもある存在だったそうです。高校は強豪である山梨県立日川高校に推薦入学が決まり、更なる活躍が期待されていました。しかし、入学式の5日前、悲劇は起きました…。入学前から参加していた日川高校での練習中、正幸さんは突然倒れ、意識を失います。運ばれた病院で下された診断は「脳動静脈奇形」。先天性の病だったそうです。すぐに手術が行われ、なんとか一命は取り留めます。意識を失ってから11日目、奇跡的に意識を取り戻しますが、右半身が動かない後遺症が残ってしまいます。医師からも「今後バスケットボールをプレーするのは厳しいでしょう。」と告げられます。そんな中でも、弱音を吐かず、日々のリハビリに励んだ正幸さん。正幸さんの家族や日川高校のバスケット部の仲間、監督も前向きな声かけを常にかけていたそうです。そんなひたむきな努力も報われ、4ヶ月で歩けるまでに回復。病院からは初めての外出許可がありました。正幸さんは真っ先に日川高校の体育館に行き、仲間が練習している姿を目に焼き付けたそうです。正幸さんは「必ずもう一度コートに戻る」と決意します。

それからリハビリを続け、正幸さんは少しずつ回復していきます。日川高校の練習にも毎日参加するようになりましたが、当然、周りと同じメニューをこなすのは難しかったそうです。しかし、「日川のバスケットで何か一つでも役に立ちたい」という思いが、正幸さんの原動力になっていました。

月日が流れ、正幸さんは高校3年生になります。ある日のミーティング、「正幸がこれまでどれだけ頑張ってきたか、みんなよく知っていると思う。3年生は夏に引退する。そこで提案だが、正幸を試合に出したいと思う。みんなはどう思う?」と監督は話します。チームの仲間は全員賛成。どれだけ正幸さんが努力をしてきたかをチーム全員が知っていました。もともと右利きでしたが、右半身が動かないため、左手一本でのシュートを正幸さんは毎日練習していたのです。一日も休むことなく…。

負ければ3年生は引退となるインターハイの県予選。練習では、正幸さんがシュートを決めるためのフォーメーションを考えていました。そして、インターハイ県予選当日を迎えます。第1試合、前半は苦戦を強いられますが、後半徐々に差を広げていきます。試合時間が残り3分となり、ついに正幸さんの出番が回ってきました。チーム全員で考えたフォーメーションを実践し……正幸さんは「3年間で最初で最後のシュート」を決めました。シュートが決まった瞬間、一番喜んでしたのは、チームの仲間達でした。チームの快進撃は続き、県予選は優勝。17回目のインターハイ出場を決めたのです。

私はこの物語をテレビを通じて知りました。「奇跡のシュート」と言われていましたが、私はそうではないと思います。確かに、そのシュートが決まった部分だけを切り抜けば、「奇跡のシュート」と言ってもいいかもしれませんが、毎日休むこともなく、弱音を吐かずに練習をしてきた正幸さんの努力の賜物だと思います。

奇跡は努力の結晶

努力の上に花が咲く

あなたは、今、自信をもって努力していることはありますか?